

第34号
Vol.12-1
2015年5月1日

Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人嬉泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 204, 2nd floor, Methodist Apartment, No. 17, Hose Lane, 96000 Sibu, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 Tel.Fax: +60-84-31-0757 E-mail: info@ace-jps.com; g.kerkn@gmail.com



「ムヒバ」の池は公園のようにになりました

撮影者 中澤 和代

かつてこんな時代があったらどうか。険しい、物騒な時代になった。気象や自然災害、領有権や宗教や民族による争い、日常的とも言えるテロの横行、人種差別、誘拐、殺し合い。ゆき場を失った難民が溢れ、大国同士の関係も怪しい。世界がバラバラになった感じだ。いつ世界戦争が起こっても不思議でない状況。各地で相次ぐ飛行機事故も不気味だ。

日本でも災害復興、原発事故処理、辺野古の基地建設問題、広がる格差、惨い事件など深刻な課題が多い。外国との交渉案件も山積しているのに、外からみると国をあげて景気浮揚一辺倒に見える。外国人観光客数急増や平均株価が2万円超と大はしゃぎ。世界の危機状況のなか傍観的すぎないか。日本に迫り着いた難民の殆どは滞在が認められない日本の現実。

「何より命が大事」は世界共通の認識ではなかった。自爆も虐殺も、価値の破壊も平気な集団が出現した。どう対応したら良いのか。生きるか死ぬか傍観か。殲滅(せんめつ)への道は避けたい。殺さない、殺されない道は見つかるだろうか。経験したことのない厳しい時代だけに、これまで日本が70年間維持できた平和の意味を真剣に考えたい。(健)

現地力を生かす新プロジェクト

上林 洋平

(兵庫県 在住)



ボルネオの熱帯雨林

お久しぶりです。以前第9～14号まで『ボルネオ日和』というタイトルでサラワクの日常で感じたことなどを連載させていただいておりましたが、この度、約7年ぶりに寄稿の機会をいただきました。

2008年に日本に帰国した直後に誕生した長女も、この春小学校に入学。時の流れの速さを感じています。

『ダリクチン』は、日本での生活を続けるなかで、私とサラワクをつないでくれる数少ない貴重なメディアとして、毎号楽しみに読んでいます。ムヒバセンターの現状や、トイポートプロジェクトのような新たな取り組みなど、毎号ごとに進展を見せるサラワクRCSの活動には、現地の距離感覚や人々の気質を知る者としては、ひととき驚きを感じるとともにたくさんの勇気もらっています。

私はクチンの旅行会社で、日本語スタッフとして2年ほど働いていたのですが、現地の人々と物事を進めていくのはとても難しいものでした。時間を守らないのはざら。相手は約束とさえ思っていなかったなんてこともありました。日本でなら数日で終わるはずの簡単なことに何カ月もかかってしまうのです。そんななかでもサラワクRCSがこれほどの成果を残してこ

られたのは、中澤さんご夫妻が現地に根を張り、現地の人との信頼関係を構築しながら現地にとって必要なことを根気強く行ってきたからに他ならないのだと感じています。どんなに優れた計画で、どんなにたくさんのお金があっても、現地で信頼関係を築けなければここまでの成果は出て

いなかったでしょう。

近頃、そうした「現地力」ともいべき価値、つまり「そこにいること」や「人間関係を築くこと」の大切さを今まで以上に考えるようになりました。というのも、私自身がボルネオを舞台にした新しいプロジェクトを立ち上げたからです。

そのプロジェクトとは、日本にあふれる中古のデジタルカメラをボルネオの人々に配布して、身近な自然や、暮らしの様子を撮影してもらおうというものです。

題して『ボルネオ・カメラプロジェクト』。「バル」はマレー語で新しいを意味します。「ネオ」はギリシャ語ですが同じく新しいという意味。ボルネオの自然と、人と、日本との間に写真を通して「新たな」関係を築けるようにと名付けました。

ボルネオ島では大規模な自然破壊や伝統文化の喪失が問題になっています。背景には、木材やパームオイルの膨大な需要、そして現金なしには成り立たなくなってしまうボルネオの人々の急激な生活スタイルの変化があります。日本も深く関わっている問題です。そこで、まだまだ使えるのに眠ってしまっている日本の中古デジカメで、ボルネオの人々が自然や自

身の文化にもっと目を向けるきっかけを作ればと思うのです。

私はもともと熱帯雨林の自然や現地の珍しい風習などに関心があり、自分自身がそれを写真に撮って日本人々に伝える立場になりたいと思っていたのですが、通信技術が発達し、機材があふれる今の時代なら、その役目は現地の人自身が担うことができるのではないかと考えています。現にテレビクルーや野生動物の写真家が何日かけても撮れない貴重な瞬間を、現地の人たちはふだんのくらしの中で何気なく目にしていました。しかしながらボルネオの自然や文化が、世界的に見ても価値のあるものだという事を知らない人が多いのも事実。そこで、集まった写真をデータベースにしたり、写真展や写真集へと展開したりすることで、その評価や収益を現地の人々に届け、彼らが「そこで暮らしていること」、「自然が残っていること」自体に新たな価値を見出せるようなプロジェクトにしたいと思っています。

撮影者はもちろん、カメラの配布やデータの回収などにも、現地の人々の協力が不可欠です。昔の友人や自然保護に関わるNPOのスタッフが協力してくれていますが、今の私の拠点は日本。時間の許す限り現地に赴き、協力者たちとの信頼関係を深め維持していくことが、プロジェクト成功のカギになります。

まだまだ夢のような話ですが、中澤夫妻に知り合い、一部とはいえその活動を知った者として、そのことを肝に銘じて活動していきたいと思います。

ボルネオカメラプロジェクトの情報はこちら <http://www.barunco.org>
TEL. 06-6203-4114

9か月のマレーシア生活

山田 恭子 (3月までベナン在住)

昨年度、私は所属する大学のサヴァティカルリーフを使ってベナンのマレーシア科学大学(USM)教育学部特別支援教育専攻に所属し調査研究を行う機会を得ました。同時にUSM近くのAsia Community Service (ACS)のFirst Stepにも所属し活動を行ってきました。

私は30年以上前にJICAボランティアとして、作業療法士の職種でKL近郊Cherasにある身体障害児リハビリセンターPusat Pemulihan Orang Cacat Angotta (PPOCA)で2年働いていました。当時のPPOCAは小高い丘の上であり、幹線道路のバス停から10分ほど歩きました。そして近くには、民家はなく養老院と女子少年院だけがありました。当時のPPOCAの子どもたちの障害はほとんどがポリオでした。私は若く、なおかつ十分な作業療法士としての経験がなく赴任したこともあり、まったく役に立たなかったなあの思いがあつて帰国しました。

今回、2014年7月から2015年3月までマレーシアベナンに来るにあたり私自身は、障害児への早期介入システムが日本と違って独特であることを聞いておりましたのでその視点から調査していくことが目的でした。Early Intervention Program (EIP)、病院、OTプライベートクリニック、施設、作業所など、40か所近くを訪問してきました。調査していく中で、わかってきたことは、療育における最優先事項が全く違うということ。認知課題、学習スキルの向上には大きなエネルギーを注ぐが、それ以外については殆ど関心がないことがわかってきました。就学前の障害児療育においても、家庭学習=宿題があるのは普通のこと、私にも日本の療育ではどんな宿題を出しているの?との質問がしばしば寄せられました。さらに普通の中華系の幼稚園に行ったときに、3歳児クラスのスケジュール表に

「英語・マレイ語・数学・歴史」と書かれているのは、大変驚きましたし、見学時は昼食後の昼休憩だったのですが、ほとんどの子どもが机に向かって宿題をしているのを見てさらに驚きました。普通の幼稚園を見学した後は、この状況があるから療育場面において、認知課題を優先する状況が生まれるのだと理解ができました。最優先事項が日本と全く異なるというのはどちらが優れているかとの観点で議論するものではなく、文化に根付いた最優先事項の相違だと考えています。ただ私は作業療法士ですので、生活する上で日常生



ベナン生活を支えてくださったACSの方たち

活動AIX獲得が大切で、AIX動作を獲得する中で、認知スキルの獲得のための基本スキルを養うだと何度も主張してきたし、特別支援教育に関わる人たちも理解してくれたように思います。

終わりの3か月はいろいろなところから講演に呼んでもらい、自分の考え、思いを話すことができたことも幸せでした。

さて、マレーシアの果物といえばドリアンです。昨年7月に来た時はドリアンシーズン真っ只中でしたので、たくさん食べて堪能しました。同時に出回るマンゴステインも楽しみました。実はちょっとお恥ずかしい話なのですが、年甲斐もなくドリアンを食べ過ぎてお腹を壊したこともあるぐらい、ドリアン大好きです。年末年始に

かけて家族がベナンに来た時、ベナンでのドリアンシーズンではなかったのですが、ペラからきているドリアンに出会いました。いつものドリアンに比べて10倍ぐらいの値段がしましたが、クリーミーでおいしく、両親が喜んでくれたのでまあよし、としました。ドリアン以外にも私のお気に入りの果物はたくさんあります。例えば赤くてジューシーなジャガアム、1月ごろだけに見かけた水果スナ、マゴ、モキバナ、チク、パッジョフル。

最後にベナンでのホカブドについても書きます。ベナンのホカ料理は基本的に何でも美味しかったです。その中でも最も好きなのはタロミーでした。30年前にKL近くに住んでいた時、日本人の友人たちと会うと、路地裏のホカミのお店によく行きました。そこはホカミしか扱ってなくて、大きな火で太った親父さんが勢いよく作っていました。路地裏ですから両側の建物から物干しざおが飛び出ており、タオルやパンツが干してある下で食べていました。その後何回か、マレーシアに来てホカミを注文したのですが、あのホカミとは違って不思議に思っていました。今回ベナンに来て現地の友人が教えてくれたことは、タロミーのことをKLではホカミと呼ぶとのことでした。そしてKL以外ではホカミはエビだしのヌードルのこと。この説明を聞いて今までの疑問が氷解しました。今回3月下旬にベナンを発ちましたが、最後の夕食はタロミーで締めくくりました。



研究・講演以外にも、おいしい果物、おいしいホカ料理、書ききれませんでした。おいしいデザートやおいしいパナリカなど、満足感いっぱいのマレーシア生活でした。

多民族を考える

中澤 和代

今年、私はマレーシア在住16年目を迎える。夫は23年目だ。こんなに長い間、二人とも会話は下手な英語のみ。マレー語は話せない。ムヒバセンターではメンバーがイバン語しか話さないの、やむなく簡単な単語を駆使している。それで何となく通じるから不思議である。街のスーパーで店員(イバン族)さんが、顧客の私を日本人と見て「アリガトウ」などと言ってくれると、たちまちサービス精神が頭をもたげ知っている限りのイバン語で会話を試みる。そうすると、その場が弾み、笑顔があふれ、周りの店員さんとも仲良くなれる。これが英語だと通じたとしても、面白味はない。言語とは不思議なもの、民族の誇りと文化の象徴である。

とはいうものの…、異文化の中にあつて、この16年間、心地よいことばかりではなかった。一例をあげると、スーパーのレジや空港での手続中、長い列の脇から割り込む女性(主に中国系)に度々神経を苛立たされるが、中国語が話せない私は黙って我慢する。そんな時、後にせり出された私を手招きし、順番通りに対応してくれる店員さんに出会うと嬉しい。またグループで同席しながら、他に思いを馳せることなく、大声で延々と長話をして憚らない人たち。でも、一概に言えないのは、私たちが普段親しくしている中国系の女医さんは、素晴らしい気づかいの人である。

少数民族の中にいると、日本人だからと、意味のわからないお金(個人の歯科治療費や遠征の研修費用)を求められたり、明らかな公私混同も…。気づかないなら良しとするふるまいも経験済み。あまりのことに疑心暗鬼に陥り、自分一人でひどく落ち込んでしまう。「清潔感がないのはたまらなく嫌！」夫に愚痴をこぼすと「しょうがないよ。みんな貧しかったし貨幣経済に慣れていないのだから」。この会話を何度繰り返してきたか…。

先住少数民族は、これまでの歴史の中、発展から遠く離れた地域

に居住権や開墾権を与えてきたと言う。この政策は、一見、先住民族の保護という良い国策のようにも思えるが、貧しい少数民族が村へ、奥地へと移動する結果となり、都会は、経済活動に長けている中国系が多くなっている。マレー系や少数民族は、うまく職を得られた人たちはともかく、なかなか難しいようだ。だからといって少数民族が奥地に安住の保障を与えられたわけではない。これらの土地は、ネイティブランドと言って、売買不可能な土地である。いつ何時、政府高官(側近のお金持ち〇〇さんに)土地使用許可を与えるかわからない。反対の声も届かず、大規模のパームオイルプランテーションに転用される例は多々あるらしい。土地所有権(開墾し、耕作している事実)があり、登録していても所有権をもっていない少数民族は、現在なお、土地を巡って厳しい状況にある。Muhibahセンターとて同じ条件下であるが、政府から正式にNGOとして認可が得られていることは大きい。Muhibahの存在は、この地域のイバン族にとって、政府の認可という意味で多少の安心材料かも知れない。

しかし、私たちも日本人として他からどう見られているか…、ある時代にはエコノミックアニマルと言われ、嘗ては侵略側の歴史がある。個人としても欠点の多い自分を意識し、襟を正すしかない。世界で民主主義を標榜している国であっても、自国の不利益とあらば、たちまち牙を向く。国や民族間でお互いを批判しても双方に正義はあるだろう。ましてや武器の使用など論外である。

多民族の国では、人種による優劣の思い込み、結果としての経済格差などが常に内在している。民族間の争いを抑えるためには、これらを超えて研ぎすまさねばならぬ教訓が必要である。マレーシアでは過去の苦い経験を踏まえ、民族間の争いが紛争に至らないよう国側の工夫や調整(ブミプトラ政策)がある。善し悪しは別として、

貧しい人たちへの現金支給も度々行われている。また、イスラム教を国の宗教としながらも他宗教を認めている大らかな国である。

今、世界で騒がれているISや過激派と言われている集団も、宗教を根として、長年の生きにくさや差別に対し、間違った自己流の教義概念の下、暴力的支配に至っている。この世界で、それぞれを認め合うのは難しいことだろうか。

日本では、経験することのなかった異民族への思いは、私の世界観を変え、人間観を変化させてくれたと思う。いずれにしろ、グローバル化により、例外なく、多民族があたり前の時代になった。

～夢を見ていた。大きな部屋にワイワイガヤガヤとイバンの人たちが集まっていた…。中の一人が私の顔に白い大きなシャボン(石鹸)の固まりをベタッとくっつけた。周りを見てみると、ほとんどの女性が化粧品の講習の如く、白いものをつけている。私は、「これ、すぐ落ちるの～?」と言いつつ、みんなに習って顔にのべた。そのこと自体は、ちっとも可笑しいことではないのに、みんな一緒に大声で笑い合っている。なんでもないその事…。なのになスゴイ幸せな仲間意識がこみ上げてきた。日本人は私一人なのに～。

目覚めた後ももしばらく幸福感は残っていた。この感じは好き。許し合うこと、認め合うこと、優劣ではなく、出来ることで助けあう

こと。だから笑顔があふれている。日常の嫌なことはみんな忘れて幸せを共有できる。国や宗教、習慣を超えられるかどうかは、こんなところに鍵があるように思うのは、私の独り合点でしょうか。



マレーシアは一つの意味を数字の1に国旗を巻いて

ACSだより

Khor Ai-Na

☆☆☆ 最近の活動状況



トイライブラリー「JIM」での山田恭子さん

●First Step Centre

2014年学期末、Seberang JayaのSunway Hotelで卒業式を行いました。GelugorとSeberang Jaya両センターの各11名の子どもたちが卒業しました。

京都、仏教大学の山田恭子教授がサバティカル休暇でUSM〔大学〕に席を置き、ACSのFirst Step Centreで、障害児に対するOT〔作業療法〕の考え、スキルを熱心に伝授してくださいました。特に日常生活動作に関しては、各子どもたちの特徴を、把握すること、それをもっていかに成長をサポート

することが出来るかを、具体的にわかりやすく教えてくださいました。ありがとうございました。

●Stepping Stone Work Centre

ペナン州保健局とのパートナーシップで、給食コースの具体的な規格をはじめました。保健局の指導により、絵文字でマニュアルを作成、障害者や出稼ぎ労働者用にも利用できるようにしたいと考えています。

●Bakery Galore

旧正月を迎える数ヶ月前から、ベーカリー部門では多忙を極め、オープンが故障せずに利用できたことは一安心でした。そしてベーカリー部門で働くメンバーは、数回、作業所で泊り込み、注文のクッキーを焼き上げました。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

●専門機関との共同企画

USM(マレーシア科学大学)との共同企画によるエコフレンドリーパ

ートナーシップを結び、1「パティク洗濯水の有効利用」、2川床による「エコ粘土」を調査・研究しています。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

●ワークショップ

2015年1月10日、バレット・インターナショナル代表谷口奈保子氏とそのチームによる活動と知的障害の就労支援の現状講演会を持ちました。

ジョン・フォスター氏〔ノアの箱舟CEO、オーストラリア〕による国立障害者保険計画 (NDIS) の講演。

2013年に開始されてから障害者の各家族に対し、必要な支援をエンパワメントする新しいサービスです。

1月30日、花村重聖氏 (JICAシニアボランティア) による、「浮き出し紙の具体的なやり方」ワークショップを行いました。



RCSはいま

中澤 健

☆☆☆ 新メンバー紹介 ☆☆☆

今年2月2日、ナナちゃんが「ムヒバ」の22人目の仲間になった。マレーシアの学年はじめは1月。12月で小学校を卒業した彼女は、地元の中学に入学を許可されず在宅となった。両親は離婚後再婚などで居らず、お姉さんは結婚していてお祖父ちゃんと二人暮らし。1月末になって、不憫に思ったお祖父ちゃんが、彼女を「ムヒバ」に連れてきた。無口で下を向いて質問にも殆ど答えなかった13歳の彼女。事情を知ったスタッフの総意で即座に入所が決まった。

あれから2ヶ月半、彼女は別人のようだ。小学校で書けなかったという自分の名前を書き、大き

な声で話し楽しげに笑っている。仲間になって1週間後のケースカンファレンスでの問題点は、話さないこと、笑わない、机での勉強が出来ない等が挙げられていた。祖父の意見として、友だちがいなくて可哀想、と記してある。すっかり変わった彼女は今、織物もミシン掛けも大好き。そこで頑張って新しい織機2台を日本に注文した。送料込みで21万円余は厳しいが、それ以上に彼女が楽しげに織機に向かう姿も織機を提供するロシタらの行為も、本当に嬉しい。

「ムヒバ」のブランコ場の場所は毎日昼休みに賑わう。男性も女性も小さい子も40代も、みんなの憩

いの場だ。KL損保ジャパン寄贈のブランコ、ワークキャンパーが汗を流して屋根をつけ、コンクリートをこね、ベンチをつくり色を塗り、マラッカが絵を描いた。スタッフも一緒に昼休み。マラッカがギターをつま弾き、アンドリューが歌う。歌声が笑顔と共に飛び交う。豊かな空気がみんなを包んで心が和む。

ブランコ場での、ある日の昼休み
中央がナナ

じやらんじやらん ちやり がわん♪(33回)

天皇皇后両陛下のハゼ

上杉 誠

先日、僕の住んでいるパラオに天皇皇后両陛下がご来訪いただいたので、それに関連したボルネオでも見られる天皇陛下にまつわる生き物の話を少し。

天皇陛下は世界各地の学会の名誉会員なども勤められ、海洋生物の世界では有名な方なのですが、それはお飾りとしての名声ではなく、主にハゼ科の魚に力を注いで研究されている世界的にも有名な魚類学者という一面を持っておられるからなのです。その研究成果は、30篇以上の論文として発表され、ハゼ科の分類には欠かせない素晴らしい発見もされています。そんな陛下はたくさんのハゼに名前を付けておられますが、実に美しい名前をつけています。「羽衣鯨」「銀河鯨」「日輪伊達鯨」などなど…。いずれもボルネオでも見られるハゼの仲間たちです。

そんな中でも、ボルネオでのダ

イビング中に見られる美しいハゼが、写真に載せている「アケボノハゼ(曙鯨)」です。

白地の体から、薄墨、紺色へと変わっていくグラデーションの体は、夜が明ける前の薄暮の夜空のよう。そして体を縁取る真紅の鱗はまさに昇ってゆく曙そのものの色です。顔は黄色に水色薄紫と派手ながらも整ったデザインで、アイシャドーまでした美しい顔をしています。そしてこのアケボノハゼの名は、皇后美智子陛下が提案された名前を取り入れたなんていう逸話もあり、お二人の仲睦まじさをも感じさせてくれる、素敵なお名前なのです。

この小さな魚は、その美しさもあいまってダイバーたちには人気のある魚なのですが、ダイビングのできる海の中でもちょっと深めの水深にいることが多く、見ることのできる機会はそれ程多くはあ



アケボノハゼ

りません。ところがボルネオでは他の海に比べると浅めの水深で見ることができるので、ボルネオでダイビングをしたなら是非とも見ておきたい魚の一つでもあります。水族館や熱帯魚屋さんでも見ることのできる魚ではありますが、実際に海で見る美しさには全く持って適うものではありません。

日本の誇る魚類学者の付けた、高貴な名前を持つこの魚に会いにボルネオまで来て見ませんか？

jalan jalan curi kaman はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

今年のACE総会を、6月13日(土)に開催します。会場は「TKP市ヶ谷カンファレンスセンター」です。例年と異なりますのでお間違えのないようお願いします。午後、1時半開始です。参加費2500円。JR市ヶ谷駅より徒歩約2分、東京メトロ南北線・有楽町線「市ヶ谷駅」7番出口より徒歩約1分、4番出口より徒歩約2分のところ。どなたもご参加ください。詳細はHP:<http://ace-jps.cwom/>トピックスに掲載しています。

ACEに入会のお誘い

*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会(ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナンのMCSとサラワクのRCSの活動を支援しています。

*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

編集後記

2015年のスタートは、ISと日本人との衝撃的関わりから、どうなることかと一時は睡眠中もスマホが手放せずあれこれ想像してみた。結局、残念な結果となり、詳細もわからないまま、次はMH追撃事件、そしてAir Asia墜落。実際、中東だけではなく、世界は恐怖へ直走しているように思う。多くの難民、罪なき人の死。どうしても私たちはこの動きに乗ってはいけぬ。どうすればいいんだろう。Dari Kuchingの投稿者も読者も、みんな平和を望み、笑顔を期待しています。(Kazuyo)

爽やかな風と緑が、日本全国に広がっていることでしょうか。マレーシアも、はやり時期の花が咲き果物が実っています。自然が頑張ってリズムを守ろうと進んできているような気がします。人間の世界の横暴は、もう止まらないのでしょうか。人間社会とはそういうものなのでしょうか。自重、自制、今号編集中心にも、そんな言葉がしきりに頭に浮かびます。どうぞ皆様お元気で。(Ken)